

絵と布の画廊歳時記

児島 俊郎

児島 俊郎

(略歴)

桐朋高校卒 20期 H組

東洋大学文学部哲学科中退

1977年 叔父が経営する日本橋画廊から独立開業

1979年 渋谷区神宮前3丁目に児嶋画廊開廊

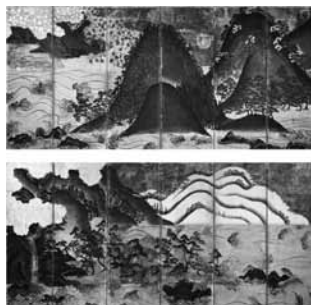
1997年 中央区銀座1丁目に画廊を移転

2004年 港区六本木1丁目に画廊を移転

2013年 国分寺市泉町1丁目に丘の上APTを竣工、画廊を移転



『新緑の山』1938年頃 個人蔵



『日月山水図屏風一双』 金剛寺蔵

近代絵画と俳句はどちらも同じように日常の瞬間の情景や気候、行事といったものを人々の心に記号的要素として伝え、日本人の情緒の奥深く息づく自然との共生を呼び覚まします。

故郷や どちらを見ても 山笑う 正岡子規

山笑うは春の季語で、新緑は夏の季語になるらしい。いずれにしろ、山が笑うと考える民族は先住民族と呼ばれる自然と和解しあっていた人々に違いありません。自然を神と思えば、当然、神様は笑うこともあるだろうし、怒りもするだろうし、泣きもするでしょう。日本人の中に、まだこの感覚が残っていることは、喜ばしいことだと思います。

参考図版の日月山水図はあまりにも有名な屏風です。よく目にするのは上に掲げてある左翼ですが、ユニークなのは右翼のほうではないでしょうか。波は沸き立ち、松はまるでブレイクダンスをしているようにくねくねと腰を使い、左隅では滝が放尿し、右側の白い山は、もう笑いを堪えきれずに身



『菊』 40号 1941年 法人蔵

をよじっているようにも見えます。児島善三郎の『新緑の山』はこの両図を巧みに取り入れて構想したんじゃないかなんて思うと楽しくなります。画面奥に連なる、そんなに高くはないと思われる山の連なりと、手前の丸で括られた木々の塊は、中景の鳥居カコンデンサーの連続に見える茶色の列柱のようなものを通じて対峙しています。下半分はまるでコーラスラインのようにスウィングしながら春、春♪と指を鳴らしていませんか。上半分の山並みはアンパンマンのような顔で「イエーイ、ベイビー」と合いの手を入れながらスカシテいるみたい。絵は楽しいですね。画集を作りながら浮き上がってきたのは、この絵が描かれた1938（昭和13）年頃が善三郎の仕事の真骨頂とも言っている、当たり年だったのではということ。善三郎、四十五歳。因みに、子規の故郷伊予の隣県にある讚岐富士と呼ばれる飯野山の姿は上図の山にまことに良く似ています。（2011年5月号）

この道や行く人なしに秋の暮れ 芭蕉

編集中の画集用の撮影で、五月にさる大企業の役員応接室へお邪魔しました。広々としたロビーの真正面にこの菊の絵が掛かっていました。まさに権力の象徴のように周囲を睥睨し圧倒しています。普段、画廊では分からない、また感じられない絵画の力です。このようなことは、撮影取材を通して行った先々の会社で経験することが出来まし

た。まさに、画格の大きさ画品の高さがあるのをいつているのだと感じました。また、同時になんとも誇り高い、幸せな気分も味わうことが出来ました。以前にも何度かご紹介しましたが、この絵の頃から善三郎は個性の没却をしきりに口にするようになります。昭和17年に刊行された画集の序文にも「私は今迄の自己を一度全部破棄して、個性と捨てていたものを放下する決心で居る。今迄の小さな自我を清算した時、広々とした天地万有の生命が私の中に流れ込んでくる気がする。自己滅却によって森羅万象の生命が、初めて大きな息吹きを以て再生するであろう」と吠えています。しかし時局は日に日に厳しさを増し、昭和18年以降、終戦の翌年ころまでは画業に残るような作品はほとんど生まれませんでした。そして、名作『アルプスへの道』を描く前後の大久保泰氏への手紙の中で、「(前略)客観性だけでは存在の把握は結局不可能だと悟りました。主観に客観性の裏付けがあつて初めて存在の把握は出来るのです。(後略)」と当たり前のことを気付くのに自分は30年苦勞をしたと告白しています。

掲載の句は、芭蕉翁がなくなるひと月前に詠んだ辞世の句の一つといわれるものです。どの道も究めることの難しさ、その道程の厳しさに加え、一人歩み続ける独蝸のような寂寥感をしみじみと平易に遺しています。連れ添った肉体は消滅し、残された情緒と作品だけが久遠の命を宿してゆきます。

団扇形の江戸裂は屏風に張り込みになっていたものを、額装するつもりで剥がして、そのままになっているものです。なんともいい味を醸し出しています。(2011年10月号)

田一枚一枚づつに残る雪 高浜虚子

例年になく寒い朝が続きます。2月末に近いのに梅の蕾もかたいままです。小生の子供の頃は国分寺でもよく雪が積りました。軽く30センチは積もります。家の横の急坂で橇遊びをしたり、スキーをしたり楽しい思い出が沢山あります。父が若いころ使っていたヒッコリーの一枚板の山スキーが蔵に残っていたので、ゴム長靴をヒモか縄でぐるぐるに巻いてやつと固定して、かんじきのような輪っばの付いたストックを短く持ってジャンプ台のような坂に挑みます。こう書いてみると、その時の緊張感や恐怖が鮮やかに甦ってきます。そんなことを思い出しな



『残雪』12号 1937年泉屋博古館分館蔵

がらこの絵を眺めていると、雪の降った後の田圃は全くこの絵のままです。真直ぐ田圃の間を流れてきた野川が岩崎別荘の下付近で小金井方面に大きく蛇行するあたりを描いたものです。畦道には雪が残りますが、湧き水は少し暖かいのか田表は薄氷をはったところや、シャーベット状になったところや、すっかり解けているところと様々です。薄氷は金つばの衣に似て昔ガラスのようです。その薄衣の下を水はちよろちよろと流れ、微生物たちは氷のステンドグラスに守られながら、春を少しづつ、少しづつ懸命に作りだしているように見えます。冷たい雪や氷でさえ場合によっては、雪洞やカマクラのように心地よい環境



『芦ノ湖』1940年頃 10号 児嶋画廊蔵

を作ってくれます。つい最近のことですが、国分寺の湧水群と野川の環境や生態系を守ったり、考えたりする「おたかフェ水の学校」という活動をされている方々が画廊を訪ねてこられ、国分寺の野川とその両岸に広がっていた田圃をこよなく愛し、昭和11年から26年にかけてその四季を百点以上も描き続けた画家がいたということで善三郎をホームページ上で紹介してくれることになりました。没後50年を迎えた本年、九州、北海道で関連の展覧会が三か所で開催されます。(2012年2月号)

夏富士のひえびえとして夜を流す 飯田龍太

紀元2600年の奉祝展に国分寺跡の松と桜を描いた『松桜図』100号を出品した後の作だろうと思われまます。日本中が浮かれ上がった後の虚しさが画面から伝わってきます。

この年の暮れの大久保泰氏への書簡の中には、個性の没却という言葉が出て参ります。これ以前も後も、飽きるほど通って描いた芦ノ湖ですが、この絵を凝視して思いするのは、昼と夜の間の僅かな刹那の中に視界を遮るすべての反射が忽然と消え、まるで偏光サングラスを掛けて風景を見ているような瞬間が存在するということの

実感です。それは宇宙空間から天の川を見るように神々しく、万物生命の耀きを一瞬にして共感できる至福の一時のように思われます。世相は此の頃から、軍国主義者やその賛同者の時空軸と芸術家や自然科学者のそれとが大きく乖離しました。軍部に協力して戦争画を描いたもの以外、戦争中の画家はとても惨めだったろうと思います。

碁打ちや将棋指しと同じく絵描きには絵を描くしか能がありません。家の周りの田畑にイーゼルを立てて風景を写生していても、近所の農家の労働力であった次男や三男は徴用され南洋で戦っています。のんびり田園の写生している絵描きの姿など端から見れば非国民そのものに写ったことでしょう。そこで、絵を描くこと以外に何もできない男も近所の荒地を借りて開墾し、肥溜めの人糞を肥たごに入れて運んだりしたそうですが、素人が天秤棒を担いでもチャップンチャップンと揺れ動き中身はほとんどこぼれてしまうような有り様だったと父や母から聞いたことがあります。そんな訳で家から離れた箱根や伊豆や信州にまで出かけて行って絵を描いたのかもしれない。掲載の句を詠んだ飯田龍太は俳人飯田蛇笏の四男で1920年に生まれ、2007年まで山梨県を中心に活躍した俳人です。山梨側から詠んだ富士の句かも知れませんが、この絵の中に流れる、空と山と湖の藍が一つになる瞬間をととても良く表しているように思い選びました。

(2012年7月号)

朴の葉や秋天高くむしばめる 飯田蛇笏

武蔵野台地はほとんどが雑木林と開墾された新田に覆われたなだらかな丘陵地でした。



『国分寺風景 (森)』12号個人蔵

北西方面からみて、秩父から連なる山間地を出ると森と呼べるほどのところは、現在トトロの森で有名になった狭山丘陵以外に大きな森は見当たりません。この絵が描かれたころからどんどん開発が進み雑木林も切り開かれ、現在、緑が自然の形で残っているのはグーグルの航空写真を見てもほんの僅かです。

そんな貴重な森が我が家のすぐそばに今でもあります。そこは国分寺崖線とよばれ、国分寺から深大寺を経て田園調布の方までつながっている古い多摩川の河岸段丘です。毎朝犬と散歩するコースになっているのですが、急峻な斜面のせいで開発から逃れ、背の高い木々が天を覆うように枝を広げています。昔はその森も今よりずっと広く深かったと思います。

この絵はおそらく間違いなくその森を描いたもので、他に未完の習作が一点残されています。善三郎の画としては構図、色彩共にちょっと変わった感じを受けます。何より色調が暗いですよね。きつと晩秋の夕暮れ近くなのでしょう。

次は、画面左側の櫓か櫓に見える高木がほとんど平面的に描かれているのが不思議ですが、それにはわけがあります。

他の木々は思いっきりデフォルメされていて、いちばん右の空中に浮いているような木はまるで遊園地の絶叫マシンの

ように震動して見えます。白の縁取りが加速して、画面上半分はリズムを取りながらアフリカンビートを打っているみたいですが。静と動を極端な対比で見せている訳です。こんなのは、なにか前衛音楽の図形譜で見たような気がしてきました。それと、もう一点変わって見えるのは、おなじみの小屋の形の人家が無いことです。たいがい家や畑や田圃など生活の気配が画中に織り込まれているのですが、この絵ではその代わりに左の木の下に通り抜けられそうな小道が暗示的に示されています。トトロが寝ている場所に通じる小径みたいです。常に表現の可能性に挑戦し続けた善三郎らしい意欲的傑作だと思い、新画集では150点の名作選の中に入れました。掲載の蛇笏の句もなかなか味わいがあり、この絵と深く通じているように思います。天高くそびえた木々の梢のシルエットがまるで毛虫や蚕が葉を食いちぎった後の穴凹だらけのように見えたのでしょうか。鋭い感性まで透けて見えるようです。

(2012年11月号)

五位鷲の声したたるや走梅雨 市村究一郎

歳時記が隔月になったとたんに日々の感覚がかくも雑になってしまおうとは考えてもいませんでした。毎朝の犬の散歩でさえ、季節の移り変わりを少しでも見逃すまいと雑木林の中をキョロキョロしていたのに最近では暢気なものです。譬えるのも何ですが、毎日、献立を考えて晩御飯を作っていたのが外食を挟んで一日おきになったような感じで、つい今夜も手抜き料理でな具合になると似ているかもしれません。そこで今回もおなじみのメニュー、国分寺の田圃の風景です。『田園初夏』という題名



『田園初夏』22.8 × 53.1cm 1950年 児嶋画廊

どおり田圃も森や林も緑一色ですが、清々しく晴れ渡っている感じではありません。空もどんよりして、そこいらじゅう梅雨という雰囲気です。また、緑一色と言っても、善三郎の使う緑の多さとヴァールの多様さはほかに比べる画家がいなといわれたほどですから、これ以上水分を含むことが出来ない飽和状態の緑だということが画面から伝わって参ります。

構図も随分とシネマスコープです。長辺は10号と同じ53cmですが極端に横長です。

横長の構図と言えば青木繁の「海の幸」が思い浮かびます。あの絵の場合は大きな魚を担いだ裸形の漁師たちが右から左へと進んで行く隊列がメインテーマで、福田たねがモデルと言われる美少年か美少女かわからない、でも明らかに他の荒くれた漁師たちとは違う美しい人物がこちらに何か秘密の合図を送る様に視線を送ってきているドラマティックなシーンが描かれています。横に時間軸を置く鳥獣戯画や信起山絵巻のような伝統的絵巻物表現を受け継いでいるように思えます。それに比べると善三郎のこの横長表現はちよいと違って、先ほども書いたように「そこいらじゅう」という意味を表しているような気がいたします。画面いっぱいにとったりと、という感じです。無邊なるかな、これだけ広い風景の中でですから画面上に描かれて見えなくても五位鷺が川縁りで鳴いてい

ても不思議じゃないし、田圃や林には無数の虫や小動物、両生類、爬虫類がわんさかといるだろうし、小川や畔の水路にはヤゴやザリガニ、ゲンゴロウ、ドジョウ、小魚に川エビなどの水生生物が五万といるはずだ。家は数軒見えますが人の姿は見えません。目に見えるもの、見えないものといったような表現がよく使われますが、この絵には見えない物の方が沢山書き込まれているような気がします。「汝ら天地一切のものに感謝せよ！」善三郎も傾倒していた「生長の家」谷口雅春氏の教えがアジアモンスーン地帯の稲作文化の恵みと共に浸みだして見えてくるようです。六十年前には存在していた自然の中の複雑系の調和が、この後あつという間に崩壊していったのは、開発という名の人間が作り出した津波の為せる業でした。

(2013年5・6月合併号)

夏草に愛慕濃く踏む道ありぬ 杉田久女

わが家の西側に最後まで残っていた、武蔵野の面影を残していた一段高い土地が松ノ木や榎の大木を伐採され無残な更地になっていたのが、四つに分譲され今二軒の家が完成したところです。しかし、未だ家の建っていない二区画は大人の背を超えるほどに茂った夏草に覆われています。冬の間には土ぼこりがもうもうと舞い、我が家に襲来してきていたことを思うと、自然の力のすごさにあらためて驚きます。すべてを埋め尽くす勢いは、草間力と形容してもよいかと思えます。

ご覧いただいている『夏草』は私の大好きな作品のひとつというよりは機会さえめぐり来たれば、手元に欲しいものです。一般的には解りづらい構図かも知れませんが、善三郎中期の名作だと思います。



『夏草』45.0 × 53.0cm 1939-42年 個人蔵

今回は余りの符合に掲載の杉田久女の句と一緒に見て行きたいと思います。久女は善三郎より三歳お姉さんの薩摩おじよです。ホトトギスに投句、高浜虚子に師事しますが、感情表現の激しさからか師匠の虚子から破門されます。

絵も句も、この暑い暑い時節に、遠慮なく熱い息を首筋あたりに吹きかけてきます。

冒頭に書きましたように夏草は、あつという間に細い道など覆い尽くしてしまう力を持っているのですから、あんなにはつきりと道がついているのは、誰かが、何かがしきりに往き来しているからだと解りますよね。アルゼンチンタンゴのバンドネオンの調べが聞こえてきたところで閑話休題。曲目は皆様ご存じの「ラ・クンパルシータ」ですのでそれぞれに頭の中で再生してください。失礼しましたが、今、この組み合わせはどうしてかというと、善三郎が愛した国分寺崖線にある「はけ」と男女の愛憎を描いてベストセラーになった昭和25年に出版された大岡昇平の『武蔵野夫人』を読んだばかりだったからです。なぜ、読んだかという友人からお前、はけの上に住んでいるのに知らないのはいだらうといわれたからです。確かに読んでみると、「はけ、はけ、はけ」でペンキ屋の書いた小説かと思うぐら

い「はげ」が出てきます。去年は北海道の木田金次郎美術館を訪ねるのに、念のために有島武郎の『生まれ出ずる悩み』と『或る女』を読みました。時代は隔たりますが、『或る女』も『武蔵野夫人』もモーパーサンの『女の一生』に代表されるフランス文学の影響で、女性の恋愛心理描写にもうしつこいぐらい終始します。絵に戻りますが、何故道が意味ありげに観者を絵の奥へと導いて行くのか昔から不思議に思っていました。一番月並みで通俗な「道」をほとんどセンターに入れるのは普通は気が引けます。しかし、この道がやがて『アルプスへの道』レゾネNO. 808の道へ『森と聚落』レゾネNO. 1134の道へと繋がってゆくことを思うと、その思い切りは解るような気もしてきます。久女は昭和21年福岡太宰府市の病院で栄養失調のため57歳で他界します。同じ年、善三郎は北海道から帰京し、その足で郷里福岡へ旅立ち、太宰府近郊や筑後川流域を写生して歩いています。『樋口付近』という同年の小品に大きく立つ、ハゼの木の紅葉が痛いほど目に沁みます。

(2013年7・8月合併号)

夏立つや衣桁にかはる風の色 也有

今年の冬は例年になく寒さが続き大雪にも難儀しましたし、桜の頃も身を伸ばしきることなく過ぎてしまつた気が致します。幾分年を重ねた身にとつて身辺の変化は少なからず負担だつたようです。しかし、片付けもようやく先が見え、新しい画廊にも親しみを覚えて来ると、むくむくとやる気が湧いて参りました。まだ風は時折強く吹きますが、このところに来て、ようやく陽光に包まれたすばらしい季節の到来を全身で感じる事が出来るようになりました。身も心も軽やかに踊りだしたいよう



『国分寺風景』 初夏 6号 1950年頃 個人蔵

な気分です。掲載の絵のように沸き立ってくる緑の波を全身に感じます。長い低迷の時期を耐え忍んだ我が画廊もようやく更衣の季節を迎えたような気がします。これからはサボっていた展覧会活動も再開し、生まれ育った地に恩返しのできるよう頑張つてゆこうと思つています。絵画の価格もアベノミクスの影響でだいぶ高くなってきました。このまま、何もおこらずに進んでいってほしいものです。

新しい画廊の周りはずつかり住宅街になり、以前の武蔵野の面影はすつかり薄くなつてしまいました。武蔵国分寺公園に連なるはけの下には名水百選にも選ばれた湧水や真姿の池があります。毎朝の愛犬との散歩もすばらしいリフレッシュのひとときです。皆様も是非お遊びにお出かけ下さい。丘の上A P Tは自宅と同じく建築家藤森照信さんをお願いすることができ、エキサイティングなスペースになりました。「丘の上A P T」とは以前に父が建てた丘の上アパートから名前をもらったのですが、アート、パースペクティブ、テキストイルの頭文字を当てオマージュとしました。6月21日のオープンには祖父の「国分寺時代の田園風景展」が始まります。

(2014年5・6月合併号)

日向ぼこ縁の虫喰圧してみる 藤井紫影

すっかり、葉を落とし庭の真ん中で大きく伸びをしているのは柿の古木でしょうか。老婆が日向で縁側にしゃがんでいます。冬の陽射しは低い角度ながら強く地面に反射して、光は軒裏まで届き、藁葺き屋根の重さを何十年も支え続けてきた垂木までくつきりと照らし出しています。ここは、国分寺多喜窪松風園にある画家のアトリエから歩いて十分もかからない本村にある古い農家の庭先です。白色レグホンが二羽、わずかに残った餌をついばんでいます。冬暖とはこういう風景を言うのでしょうか。居眠りやあくびが自然と出てくる風情です。大気の湿度は20%を切るほどに乾燥し空の青さもはるかに遠い彼方にあるようです。

善三郎が昭和11年に建てたアトリエと住宅あたりは、松風園とよばれる別荘地として開発された高台で、水利が悪く耕作には不向きなところですが、南東に開けたU字谷の鼻からの眺めは、野川の清流を挟んで両側に広がる田圃を下ろす絶景で、画家にとってはまたとないロケーションでした。もう10年も前に引越してきて、雨降りや旅行でいない時を除いて、ほぼ毎日、道端や畦や雑木林にイーゼルを立ててキャンバスに筆を走らせている画家を知らない村人はいません。たいがい、婦人のハルが付き添い日傘をさしたり、筆を洗ったり世話をしています。昭和15、6年頃には大胆に洋式化した画風で、その田園風景を独立展などで発表し話題を集めていた有名な絵描きさんらしい。その画家が珍しく本村の部落にやってきた。

「ちょっと。庭先を描かせてもらっても良いですか？」と言って油絵二枚を描いていった。時は昭和

22年の冬である。

戦争が終わって2年が経つが相変わらずの食糧難です。終戦の翌年には郷里の福岡や友人の縁を頼って北海道に出かけたり、食料と画題を求めて長い旅に出ています。翌年は6月から10月まで北海道に



『冬暖』 1947年頃

滞在し札幌などで個展も開いています。知人宛の手紙には、その売り上げも旅費や飲食代で消え失せてしまったと書いています。この絵が描かれたのは長い北海道滞在から戻ってきてしばらくのことだと思われまます。北海道での無理がたたって体調は芳しくなかったようです。

目の前を歩いている鶏もうまそうだし。きつと毎朝何個かの卵も産んでいるだろう。なんとか農家の人々と仲良くなつて、少しでも食料を分けてもらいたい。そんな切実な事情が伝わってくるほど分かりやすく生真面目な絵に見えます。

そんなことを知ってか知らずか、縁側の老婆は虫喰いの跡をさすったり押ししたりしながら居

眠りのふりをしているようにも見えます。

清滝や波に散りこむ青松葉 松尾芭蕉

『激流』は最近初めて出会った作品です。



『激流』 1937年頃 4号 油彩／板

昭和10年代初期の代表作に『溪流A』、『溪流B』という作品があります。一点は衆議院議長公邸に、もう一点の方は愛知のメナード美術館に収蔵されている名品です。今回の作品は、そのエスキースの一つで、他にも以前手に入れた4号の板絵の油彩や水墨画や素描など数点が現在手元にあります。それだけ力を入れて構想を練った作品だったことが窺われます。

掲載の芭蕉の句は辞世の句として有名な「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」を書き取らせた後に弟子達を再び枕元に呼び寄せ以前に詠んだ「清滝や波に塵なき夏の月」の改作として書き留めておくよう詠んだ最後の一句といわれています。以前から考えていたことですが、善三郎はこの芭蕉の句を相当意識していたのではないかと思っています。ヨーロッパ留学から戻ってから常に追い求め

(2016年11・12月合併号)



『入江』榛名湖 1939 年頃 10 号油彩／キャンパス 法人蔵

ていた「日本人の油彩画」「東洋の洋画」の完成を目指していた画家にとって、俳聖芭蕉が人生の最後に詠んだこの一句は、まさに縄文の心、自然と人間が隔たりを全て取り去り一体となった境地そのものに映ったのではないかと想像いたします。「散りこむ青松葉」の松葉は松尾芭蕉の頭文字マツバとかがかっていて、自らが散りゆく姿を強風に煽られ流れに深く散りこむ松葉と重ねあわせた芭蕉の死生観

を表していると言われています。

(2017年8・9月合併号)

岳の影ヨットに卸せし波にあり 岡田貞峰

今年の夏の天気は不順だらけという感じですが。列島各地に大雨を降らせた梅雨末期の渋滞積乱雲に迷走台風が各地に大きな被害をもたらしました。この先も台風や竜巻など心配です。今年の夏は「縄文シャワー展示室展」で始まったので、渦巻きにはそうとう接近遭遇致しました。渦巻きはすべての生命の元になるエネルギーを表していることを一万年以上前のご先祖たちは解っていたというところが驚きです。渦巻きが重なり、連なり、

潜り込みなどしながら、土器の表面と内側との空間概念を曲げてゆきます。土器を作る粘土のことを胎土と呼びますが、縄文土器はよく女神や母親の身体に例えられたりします。土器の口辺には把手として女性の顔が付けられ、横腹からは胎児が顔を出している出産を思わせる土器もあります。まるで、人の身体のように外部は内部とつながり、内部は複雑に入り組みながら再び外部へとつながります。クラインの壺のようなその概念は生命の循環を意味するとも言われています。幼くして亡くなった生命は再び母親の胎内に戻り新たな生命として生まれ変わるとも考えられていたようです。集落全体を胎内と考えれば村で亡くなった人たちも同じような考えで再び生まれ変わってくると考えられます。このように、壺一つとつても、その内外に時間軸を置くと宇宙の生成と変わりなくなってくるように思えます。年老いた巨星が白色矮星になりやがて収縮を始め、ついにはブラックホールになり、すべてのものをみ込み、やがて次元を超えて別の宇宙に再生するなどと考えてみるのも普段の雑事から解放される夏休みの楽しみに良いかもしれません。

掲載の絵は真夏の榛名湖が題材になっています。山湖に影を落とす山影を縫うようにヨットが静かに進むようになっているように見えます。すでに大陸では不穏な空気が動き出している昭和14年の夏休みの景色です。空に浮かぶ丸三角の雲とTシャツを干しているような雲が仙厓和尚の禅画を思わせて愉快です。この雲が代表作『アルプスへの道』（昭和26年作）の空へと流れてゆきます。

（2017年7・8月合併号）

澄むものの限り尽くせり秋の水 乙二

空気もキーンと引き締まり山の湖にも晩秋の色が濃い。ここも画家の定点観測の場所の一つです。初めて迎えるのが1937年に描かれた『晩秋の蘆湖』という題の同じく10号で、翌年にも『芦ノ湖



『函根の晩秋』1946年10号 油彩／キャンバス

晩秋』が描かれています。また、その翌年の1939年にも『芦ノ湖晩秋』と続きます。1941年には『蘆之湖初夏』、1942年には同じく初夏に3点、掲載の絵が1946年、1951年に5点と同じ10号のFサイズでほぼ同じ場所、若しくは近い場所にイーゼルを立てています。画面構成はよく似ていますが一作一作工夫を凝らし、手前の箱根神社あたりから恩賜公園の半島をかすめて対岸を描きます。

ちょうど、その距離感が良いのと、ゴルフの弾道の反対曲線のような視点の移動が面白かったでしょう。国分寺でも同じような練習をしているのですが、そのスケールが全く違います。手造りの代々木の自宅の庭の距離感から国分寺

の野川を挟む浅いU字谷の空間へ、そして、この箱根の大きなボウルの底のような空間へと善三郎の実験は続きます。直線的遠近法ではなく弛ませた張綱の上を歩いて渡る様な空間の把握、中間の空間のリアリーティを描く鍛錬が風景画はもとより後年の瓶花の作品の中でのツボと花の距離や薔薇の花びら同士の距離などミクロの空間表現にも大きな力を発揮することになります。

5年ほど前から構想を練り準備を始めていた祖父の絵をふくめた日本近代洋画の台湾での展覧会がいよいよ実現の運びとなりました。この10月6日が招待日で7日から一般公開も始まりました。この展覧会のそもそもの始まりは、善三郎の単独展の企画から始まりましたが、次に梅原・児島の2人展、またそれが拡大して東京藝大、日本洋画商協同組合の記念事業と合体して、明治から戦前の昭和期の洋画家・水彩画家合わせて31作家の作品約90点の大展覧会となりました。

戦前戦後を通して、東アジアで初めての本格的日本近代洋画展の展覧会です。上に挙げた『赤い背景』は第一回独立美術協会展の出品作で1931年に台湾に巡回展示されて以来86年ぶりの展示として大きな話題となっています。展覧会后、台湾に置いてゆくつもりはないかとの打診もありました。名譽なことでもあり、日台美術交流の発展に役立てるのであれば、前向きに考えてゆきたいと思っております。展覧会に合わせて立派な図録もできました。

英文、中文もあり、日本の洋画の、今後の世界的理解の橋頭堡になっていくと確信しております。大学美術館側の話ですと、入場者数を十万人と見積もっているとのことですので、大いに期待しているところです。

(2017年9・10月合併号)